（２）各学系の研究

---

①　学校教育学系

ア　研究の特色

学校教育学系は，教育学，教育実践研究を中核とする本学の教育・研究，教職必修科目の基盤領域を形成する。全学的な教職必修科目を担当する教員が多い中で，学内において多人数講義を担いながら，多くの教員が，国，地方自治体，地域社会，学校等に至る，全国の教員研修の講師，学会等の研究活動に取り組んでいる。専門職学位課程の教員は，学部生・大学院生の指導や地域の学校に対する支援活動を行うとともに，全国の研究会講師や実践研究の取組をリードしている。また，連合博士課程においては，学校教育方法連合講座，先端課題実践開発連合講座を中心に，各講座で活発な教育研究活動を推進している。

イ　優れた点及び今後の検討課題等

本学系は，修士課程と専門職学位課程の教員による，多方面での教育・研究，学会における研究発表と論文の投稿，著書の発行，学外においては，国，地方自治体，地域社会，学校等に至る，数多くの研修会の講師や公開講座，出前講座の講師等で成果を挙げている。

本学系の教員による学内の研究プロジェクトは，継続分（一般）としては，「道徳的実践力を効果的に育成できる教師の指導力向上に関する研究～役割演技の監督としての授業者養成プログラムの開発を中心に～」，「幼児教育に関する教員の意識と指導の実際－幼小連携を促す要因の探求－」，「学校経営への「地域」の参画形態に関する国際比較研究」の３件，新規分（一般）としては，「理科に対する苦手意識克服のための教師育成に関する研究－野外観察におけるICTの活用－」，「体育科学習におけるICTを活用したアクティブ・ラーニングデザインの開発」，「「グローバルキャリア教育」を基軸にしたアクティブラーニングの開発－国際交流インストラクター事業を中心に－」，「学際型いじめ防止プログラムの開発に関する実践的研究」の４件，新規分（若手）として，「新教育委員会制度と広域教育行政チームを担う専門職」，「養育環境がセルフコントロールの発達に及ぼす影響」，「「学びに向かう力」をどのように育むか－上越大手町小の「学びの時間」実践からの検討」の３件である。

② 臨床・健康教育学系

ア 研究の特色

臨床・健康教育学系では，臨床心理学に基づいたいじめ，不登校，ひきこもり，発達障害，児童虐待，PTSDなどのこころの問題の解決に向けた研究，特別支援教育の基礎理論，各種障害（視覚障害，聴覚障害，知的障害，肢体不自由，病弱，情緒障害，言語障害，重複障害，発達障害）の心理・生理学，診断法，指導法に関する研究，学校健康教育学，医科学，養護学等に基づいた学校における健康教育に関する研究が行われている。心理教育相談室，特別支援教育実践研究センターをはじめとする臨床研究の場において，いずれも学校における喫緊の課題に対応するための臨床的，実践的研究が展開されている。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系では，心理教育相談室，特別支援教育実践研究センター及び地域の学校等において多様な臨床研究が展開されており，これらの成果は，関連学会や大学紀要のほか，『上越教育大学心理教育相談研究』や『上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要』においても公表されている。また，学校及び地域社会を含めた健康教育（学校安全，学校保健）や健康課題への対応に関する研究も盛んに行われている。

このような研究活動の一環として，今年度は次の７件の学内研究プロジェクトが実施された。

- 児童と家族の睡眠習慣の関連性に関する記述疫学的研究－小学校における睡眠健康教育の確立に向けて（Ⅱ）－
- 自己評価システムを用いた教師のメンタルヘルス支援プログラムの効果検証
- 特別な教育的ニーズのある児童を対象とした小集団活動場面における学習支援方法の検討
- 特別支援学校教師による幼・小・中学校教師を対象とした個別の指導計画作成に関わる支援のあり方に関する研究
- 特別な支援が必要な子どもの教科指導推進のための教員養成プログラム検討に関する基礎的研究
- 高等教育機関に在籍する聴覚障害学生の講義場面でのFMシステムの活用に関する研究
- 知的障害児・者の抑制機能障害に対する支援方法の検討Ⅱ

以上のように，本学系の構成員は，それぞれの領域の専門性を活かして，学内のみならず地域においても活発に研究活動を展開している。近年，子どもたちのこころの問題や健康の問題に関する研究，またインクルーシブ教育システムの構築などに対応していくための研究の重要性が指摘されている。したがって，今後は，学系に所属する教員の個々の研究とともに，学系の特性を活かしたより包括的かつ多面的な共同研究や地域貢献をさらに推進していく必要がある。

③　人文・社会教育学系

ア　研究の特色

人文・社会教育学系に属する主な研究領域は，国語学，国文学，漢文学，国語科教育，書写・書道，英語学，英米文学，英語科教育，小学校英語教育，異文化コミュニケーション，歴史学，地理学，法律学，経済学，社会学，哲学，倫理学，宗教学，社会科教育，と多岐にわたっている。

こうした研究領域における研究活動を推進するため，本学系の教員と多数の卒業生，修了生が所属する「上越教育大学国語教育学会」，「上越英語教育学会」，「上越教育大学社会科教育学会」の３学会が組織・運営されており，活発な活動がなされている。

イ　優れた点及び今後の検討課題等

本学系の教員による研究プロジェクトとして，前年度に続いて「地域の社会科教育における臨床的課題解決に向けた協働的実践研究」「小学校外国語活動における中学年を対象とした書くことを取り入れた文字指導プログラムの構築」の２件，及び２年度計画の「教科内容・教科教育・教育実践を横断したPCK研究による教師の専門職的力量の構造解明」の１件が新規に採択された。また若手研究として，「ゲーミング･シミュレーションを用いた社会問題認識手法の開発」「教員志望学生の英語リーディングの流暢さと音韻処理能力に関する実態調査」が，新たに採択された。

なお，本学系の研究領域に関する上記の３学会については，その研究活動が次のように展開されている。

「上越教育大学国語教育学会」：昭和58年７月に設立。国語科教育及び国語学，国文学，書写･書道の研究を深め，会員相互の親睦を図ることを目的とする。機関誌『上越教育大学国語研究』，学会報『上越教育大学国語教育学会報』を刊行し，例会を年２回開催する。６月の例会は卒業生・修了生による研究発表，２月の例会は卒業・修了年度の在学生による研究発表が中心だが，それぞれ教員の研究発表も加わる。

「上越英語教育学会（The Joetsu Association of English Language Education)」：平成９年９月に設立。英語科教育，英語学・言語学，異文化コミュニケーション，英米文学の研究を深めるとともに，会員相互の親睦を図ることを目的とし，研究発表会等の研究活動を促進する事業，会員間の情報交換及び親睦を促進する事業等を行っている。毎年７月に年次大会を開催し，機関誌『上越英語研究』を刊行する。

「上越教育大学社会科教育学会」：昭和61年３月に設立。会員の分布は北海道から九州，沖縄まで全国に及ぶ。月例会で地域巡検を実施するほか，毎年１回，研究大会を開催する。学会報の『上越教育大学社会科教育学会だより』を発行するほか，機関誌『上越社会研究』を刊行する。

今後の検討課題としては，本学系に属する主な研究領域において，漢文学，英文学，社会学，哲学，倫理学専攻の教員が不足していることが挙げられ，補充が望まれる。

④　自然・生活教育学系

ア　研究の特色

自然・生活教育学系は，数学，理科，技術，家庭科の４つの専門分野の教員によって構成されている。

数学分野では，代数学（代数的整数論や保型形式論等）や解析学（関数解析学の作用素理論等），幾何学（多様体の位相幾何学等）等の専門研究とともに，算数・数学の教科教育研究を柱として，全員が算数・数学の授業に直結した教育研究を行っている。

理科分野では，天文学（銀河と星の形成と進化等の研究），動物学（鳥類の社会行動及び個体群構造等）や植物学（細胞生物学や植物生態学等）等の生物学，物理学（固体の光学的特性等）や化学（天然物化学や無機・分析化学等）における専門研究を行うとともに，例えば化学の専門家が環境教育を中心とする教材研究や，生物学の専門家が生物教育における教材化に関する研究を行う等，専門性を背景とした教材研究を行っている。また教科教育研究（授業改善や教材開発等）では，理科教育の現代的課題にも積極的に取り組んでいる。

技術分野ではメカトロニクス教材の開発を中心としたエネルギー変換技術の研究や，情報ネットワークやICTに関する技術，木材加工や加工材料に関する専門的研究を行うとともに，全員が専門性を背景とした教材研究を行っている。また，教科教育研究では技術教育課程開発や技術教材の機能に関する研究を中心に技術科教育の現代的課題を見据えた教育研究を行っている。

家庭科分野では,発酵食品や植物性食品を用いた教材開発を中心とした食物学・食育についての研究,材料特性と感覚的性能との関連等を中心とした被服学や，幼児期の生活文化の伝承・獲得・共有過程に関する児童学・保育学からの専門的研究を行うとともに，全員が専門性を背景とした教材研究を行っている。また，教科教育研究では学校教育における「いのち教育」や家庭科教育に関する指導法・教材開発等の実践的研究，授業実践力向上に関する研究等，子どもや教育に直結した研究を行っている。

イ　優れた点及び今後の検討課題等

平成27年度は，本学系に所属する教員のうち12人の教員が研究代表者として科学研究費助成金を交付されている。その割合は約43％であることから，各教員が研究面でそれぞれ十分な活動を行っていることが分かる。本学系に所属する教員の研究業績の中には，以下に記すように平成27年度に国際誌へ採録された論文が多数あり,国際的に活躍している研究者が複数いることは本学系の特筆すべきことである。

″On the Markov-Dyck shifts of vertex type″, Discrete and Continuous Dynamical Systems Vol.36, No. 1, 403/422 (2016), ″C* -algebras associated with textile dynamical systems″, New York Journal of Mathematics Vol.21, 1179/1245 (2015), ″Lifting from two elliptic modular forms to Siegel modular forms of half-integral weight of even degree″, Documenta Mathematica, Vol. 21, 125/196 (2016) 外

また，地域貢献や学外貢献等も積極的に行っており，数学分野では講演会開催や独自の研究論文誌の発行，理科分野では地域の理科を研究する複数のグループのための講師，技術分野では発明クラブや科学の祭典等の企画・講師，家庭分野では農林水産省受託研究の一環として，みそ作り加工体験，発酵食品を使った料理教室の開催等，多くの活動を積極的に行っている。委員会や書類作成等々で業務が多忙化するなか，学術研究の成果を継続して発信できる研究環境をいかに創出していくかが今後の大きな課題である。

⑤　芸術・体育教育学系

ア　研究の特色

芸術・体育教育学系に所属する教員の主な研究領域は，声楽，器楽，作曲，音楽学，音楽教育学，絵画，彫刻，デザイン，工芸，美術理論・美術史，美術教育学，体育学，運動学，学校保健学，体育科教育学といった音楽，美術，保健体育の教科に関連した基礎的及び応用的な研究領域からなる。また，これらの領域は実技指導や作品・演奏発表に関しても地域社会と密接に関わり，近隣の学校や地域において音楽や美術，スポーツの普及・発展に尽力するとともに，コンクールや競技会において審査員や競技審判等を務めることも多い。平成27年度も音楽，美術では各教員の専門を生かした地域貢献活動が進められたほか，教科や領域を超えた学際的な教育，研究が進められた。

イ　優れた点及び今後の検討課題等

本年度に実施あるいは参画した研究プロジェクトとしては，「近世邦楽はどのような音楽観の上に成り立っているか～伝統音楽の授業開発に向けた基礎的研究」（研究代表者：玉村　恭），「国際交流作品展を軸とした本学の美術教育研究の発信と相互交流」（研究代表者：髙石次郎，分担者：阿部靖子，洞谷亜里佐，安部　泰，五十嵐史帆，伊藤将和，松尾大介），「教員養成における身体性を重視した教材開発の試み―音楽・美術・体育における身体技法の体験プロセスを問う―」（研究代表者：阿部靖子，分担者：大橋奈希左，玉村　恭），「特別支援が必要な子どもの教科指導推進のための教員養成プログラム検討に関する基礎的研究」（代表者：笠原芳隆，分担者：藤井和子，土田了輔，佐藤ゆかり，弓場ひかり，小黒千穂，太田文哉，佐藤杏香，千葉悠加，鴨井理恵，長谷川　哲）「体育科学習におけるICTを活用したアクティブ・ラーニングデザインの開発」（表者：水落芳明，分担者：土田了輔）兵庫教育大学大学院　連合学校教育学研究科　共同研究プロジェクト「包括的健康教育プログラム構築に向けての国際学術研究－生命科学，行動科学，情動科学の複合領域の視点によるアプローチ－」（代表者：鬼頭英明，プロジェクト協力者：池川茂樹ほか）「5-アミノレブリン酸摂取と高圧空気暴露の併用が呼吸循環応答とトレーニング量に与える影響」（代表者：池川茂樹）「幼児教育に関する教員の意識と指導の実際―幼小連携を促す要因の探求―」（研究代表者：角谷詩織，分担者：周東和好ほか）が挙げられる。

また，科学研究費採択については，「修士レベルにおける創作表現のための音楽科教員養成プログラムの日米共同開発と評価」（研究代表者：時得紀子），「創作ダンスの授業の問題点とその原理的解明―協働学習のモデル領域を目指して―」（研究代表者：大橋奈希左），「ボールゲーム指導における学習内容の開発研究」（代表：土田了輔），「5-アミノレブリン酸が運動時の熱放散能に及ぼす効果」（代表者：池川茂樹）に交付がなされ，学系所属の教員により活発に研究が進められた。